

二〇二三年度 第一回 入学試験問題

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから33ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			

I

次の文章は、一九九五年に出版された『やさしさの精神病理』の一部です。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

本来このページには大問Ⅰの問題文が掲載されていましたが、二〇二三年度の入試問題につきましては、著作権処理の関係上、掲載することができません。掲載されていた問題文の該当箇所につきましては、次の書籍を参考にしてください。

大平 健『やさしさの精神病理』岩波新書、一九九五年九月、二ページ一行目から十一ページ二行目

【注】

*アッシー君、ミツグ君……一九八〇年代後半から九〇年代初期の、いわゆる「バブル景気」の時代の流行語。「アッシー君」とは、いつでもどこでも女性を車で送迎してくれる男性のことをいい、「ミツグ君」とは、女性が欲しがるものを何でも買ってくれる男性のことをいう。

*『ハムレット』……イングリッドの劇作家シェイクスピアの戯曲で、四大悲劇の一つ。

*分裂病……精神疾患しっかんの一種で、現在では統合失調症しっちょうしやうとよばれる。

【問1】 ㉠㉡のカタカナを漢字に改めなさい（楷書で、ていねいに書くこと）。

- ㉠ ザツシ ㉡ ギノウ ㉢ ヨネン ㉣ ヒヨウバン ㉤ ソンチヨウ

【問2】 ①「頭にもやさしさが求められているのです」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを

選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 人々は、難解な問題の大まかな意味を伝えてくれる解釈よりも、細部にまで手の届く充実した解説の方を重視するようになった、ということ。

(イ) 人々は、特定分野の著者による専門書よりも、アマチュアの書き手が趣味でつくったような説明書を高く評価するようになった、ということ。

(ウ) 人々は、難解な知識や教養を苦勞して身につけることよりも、過度な負担なく手軽に分かった気になることを好むようになった、ということ。

(エ) 人々は、開けばすぐに答えを見出せるものよりも、どうしてもそうなるのか思考の過程を丁寧^{ていねい}にたどれるものを尊ぶようになった、ということ。

【問3】

——②「皮肉ではありません」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) まるで穏やかな人柄がほめられているかのようにも聞こえるが、そういうわけではなく、お互いに本音を言うことのできない上辺だけの関係性が示されている、ということ。

(イ) てっきり好意を寄せられていると勘違いしてしまいかねないが、そんなつもりなど女性にはなく、ただの都合の良い男性として軽くあしらわれているにすぎない、ということ。

(ウ) ふと口をついて出た素直な気持ちとしてとらえてしまいがちだが、その理解は必ずしも正しいわけではなく、言葉の裏側に男性をからかう気持ちも含まれている、ということ。

(エ) 一見すると遠回しにバカにされているようにもとれるが、そうした意図はまったくなく、文字通り思いやりがあつて心づかいのできる男性として認識されている、ということ。

【問4】

——③「正直言つて、この高校生の言葉には虚をつかれる思いがしました」とありますが、少女の言葉を聞いて筆者はどのように感じたのだと考えられますか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) お年寄りに席をゆずろうかどうかと迷った末に、結論が出ないから寝たふりをするという解決法は、自分に対して寛大な若者世代特有の考えに基づいており、筆者を大いに驚かせた、ということ。

(イ) 年寄り扱いされることを嫌うお年寄りがいるのを知ってはいたが、お年寄りに席をゆずらないことを、お年寄りに対する気づかいだと主張するなんて、筆者には思いもよらない発想だった、ということ。

(ウ) お年寄りに席をゆずろうとして拒絶された経験が筆者にもあったので、少女のように席をゆずらず、寝たふりをしてやり過ごすという対応は、筆者にとっても十分に共感できるものだった、ということ。

(エ) 年寄り扱いすることはお年寄りのためにならない、という意見や考えには一理あるにせよ、そのような意見を一人の少女が堂々と主張するのを知りて、筆者は大きなショックを受けた、ということ。

【問5】

④「柄にもない」、⑥「頭ごなし」とありますが、それぞれの意味として適当なものを次の中から選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) 権威のある人物の一言によって直ちに皆に従わせること。
- (イ) 相手の言い分を聞くことなくはじめから決めつけること。
- (ウ) 意外なことを見て何かの間違いではないかと感じる事。
- (エ) その人の性格や現在の立場から見てもふさわしくないこと。
- (オ) 一つの事に熱中している者は他の事を顧みなくなる事。

【問6】

——⑤「これは「やさしさ」云々の話ではなく、礼儀の表わし方の問題なのではないか」とありますが、どういことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 青年は上司に直接謝^{あやま}ってはいるが、謝罪とは相手が受け入れた時にはじめて成立するものであるため、謝罪をしたことにすらなっていないと、筆者が指摘^{しでき}しているといこと。

(イ) ひたすら頭を下げ、黙^{もく}して語らないことを上司への配慮^{はいりょ}だと青年は考えていたが、筆者を含^{ふく}めた「オヤジ世代」は本音でぶつかることこそ真の礼儀だと思いがちだ、といこと。

(ウ) 青年は、自分が充分な謝罪をしたつもりになっているが、筆者からすればその態度は、些細^{ささい}なミスの怖^{こわ}さを知る上司の忠告を理解していない振る舞いに他ならない、といこと。

(エ) 自らの非を認めて、上司の許^こしを請^{じよう}うという状況のなか、青年が結果的にその上司を怒^{おこ}らせてしまったことは、敬意に欠ける振る舞いであつたと、筆者は考えているといこと。

【問7】

——⑦「泥棒^{どろぼう}にも三分の理」とありますが、ここではどういう意味ですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 自分のはたらいた悪事は柵^{たな}に上げて、身勝手な言い訳をしてしまう、といこと。

(イ) どんなことであつても正当化しようとするば、できないことはない、といこと。

(ウ) 何事もきちんと道理を見極めようとしたら、短い時間では足りない、といこと。

(エ) どんな悪事をはたらく人間も、少しは人の役に立つ行いをしている、といこと。

【問8】——⑧「僕の前に坐る女性すわは素直すなおそうほくで、まるでふてぶてしさとは無縁むえんな感じなのです」とありますが、ということ

ですか。次の中から最も適当なものを選えび、(ア)～(エ)の記号で答こたえなさい。

(ア) 親しんの叱しかり方かたによって、自分が悪わるかったという気持きもちちが損そこなわれたことを、この女性おんなは言いい訳わけではなく心から残念ざんねんに思おもっているように、筆者しやには見みえたということ。

(イ) 怒いかりの矛ほこ先さきを親おやに向むけているこの女性おんなは、本ほん当とうのところは、やさしく叱しかられなければ反省はんせいできない自分を許ゆるせないと思おもっているように、筆者しやには見みえたということ。

(ウ) 朝あさ帰かえりを悪わるいことだと思おもっていないこの女性おんなは、自分の考かんえを疑うたがうことなく、ただ親おやの叱しかり方かたが間違まちがっていると主張しやうしているように、筆者しやには見みえたということ。

(エ) この女性おんなは、親おやや筆者しやの反はん応おうを気きにせず平然へいぜんと構かまえており、自分が年長ねんちやう者しやからどのような印象いんしやうを持もたれるのかを考かんがえていないように、筆者しやには見みえたということ。

【問9】

A

に入るべき表現として、最も適当なものを次の中から選えび、(ア)～(エ)の記号で答こたえなさい。

(ア) やさしさとは愛あいではない

(イ) やさしさに包つつまれたなら

(ウ) やさしくするには残酷ざんこくでいなくては

(エ) 真まの勇気ゆうきとやさしさは共に手たずさを携たずさえていく

【問10】

B には、次の(ア)～(エ)の文が当てはまります。意味が通るように並べ替え、その順番を解答欄の指示に従い(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) その事情ゆえに若者たちは“やさしさ”のねじれをねじれとも感じず、ごく自然なことに感じているに違いありません。

(イ) 意味がねじれてしまうほど“やさしさ”をひたすら求めてしまうのには、彼らの言う理屈以上の事情がなにかありそうです。

(ウ) 僕は、彼らの“やさしさ”の文法を知りたいと思いました。

(エ) 彼ら自身による説明は、いちおうは理解できますが、とうてい納得できるものではありません。

【問11】

⑨「考えてみると“やさしさ”も本来は人と人との気持ちの交流にかかわることです」とありますが、それに関する次の説明文について、a～fに当てはまるものを選び、それぞれ(ア)～(コ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

お年寄りに席をゆずらなかつた少女は、自分がお年寄りに対する a のない人間だと周りから思われるのが嫌で、寝たふりをしたのだと言います。また、上司に謝罪する場面で、上司から発言を求められても、「言うことがないから」と黙っていた青年は、ある意味で上司を b にしているのだと言えるでしょう。

そんな少女と青年に、共通するもの。それは、c な判断にもとづいたふるまいや態度、ということではないでしょうか。「ウチのおばあちゃん」がそうだから、「このオジイさんも年寄り扱いしたら気を悪くするかなあ」という判断。「黙ってんのは、こっちの思いやりなのに」という主張。こうした判断や主張の中に、目の前にいる相手を思い

やり、相手の身になって考えようとする a を感じ取れるでしょうか。

少女も青年も、むしろ目の前の相手と d に係かかわることを回避かいひしているように思えてなりません。それにもか
かわらず、席をゆずらないことや上司の前で黙もくっていることを、若い人たちが「やさしさ」だと言いうのだとしたら、彼
らの「やさしさ」は「ねじれている」——本来の意味とズレずれていることに、筆者は e を覚えてい
るのでしょうか。」「やさしさ」とは本来、人と人との f において必要とされる、相手への配慮はいりょや思いやりのことであるはず
です。だとすれば、身近な人に相談さたんもせず、いきなり精神科おとすを訪まねる「よろず相談かんじやの患者」たちも、身近な人と
d に係かかわらないことを、「やさしさ」だと主張する人たちなのではないでしょうか。

(ア) 違和感いわかん

(イ) 関係性

(ウ) 存在感

(エ) 親切心

(オ) 直接的

(カ) 小意気

(キ) 身勝手

(ク) 高飛車

(ケ) 小馬鹿

(コ) 常識的

【問12】

本文の内容と合致するものを、次の中から2つ選び、(ア) (カ) の記号で答えなさい。

(ア) 若者たちは、自分が傷つきたくないあまり、大人との関わりを避ける傾向にあるが、実は真剣に叱ってもらえないという物足りなさを、どこかに感じているのだろうと、筆者は分析している。

(イ) 筆者が若者たちの主張に納得しきれないのは、彼らが自分たちの世代に行きわたるやさしさのあり方を、それ程よいものだと信じていないことが、彼らの言葉から読みとれてしまうからである。

(ウ) 人びとが、人生上の悩みを相談するために精神科医を訪れるようになったのは、家族関係すらも希薄になってしまっている、という現代人の置かれた状況によるものだろうと、筆者は考えた。

(エ) 重い病状であるにもかかわらず、自分のことで人を悩ませたくないと思心配しながら診察を訪れる患者が現れたことは、以前には考えられなかったであり、筆者は戸惑いを覚えずにいられたかった。

(オ) 心を病んでいるわけでもないのに精神科を訪れる人たちを、筆者は当初遊び半分で来ているのではないかと不愉快に思っていたが、それぞれ真面目な動機で来ていることがわかり、疑っていたことを恥じた。

(カ) 現在もてはやされているやさしさが、従来のやさしさのあり方と違ったものになっているのは、人びとの関係の変化に起因しているのだろうと、筆者は患者との面談の中で考えるようになった。

Ⅱ

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

何あの子最悪、と姪の玖実子が眉間にしわを寄せて歩道を振り返る様子がルームミラーに映っていた。自転車に乗った男の子が、自転車にしてはものすごいスピードで走っていた。たぶん小学六年ぐらいだろう。マスクをしていない。

数秒前、妹の家に向かう交差点の横断歩道の左折で、右斜め後方から車に突っ込んできた彼を、①私は間一髪のところ避けた。左右確認をした後、私から見て右手の、交差点の直進側の山が目に入って、あ、山、と思いながら、また右手を見て左折のスピードをさらに落としたところ、走ってきた彼が派手にハンドルを操ってボンネットを避け、走り去っていった。彼から見た横断歩道の信号は赤だったはずだが、町にあまりにも人も車もないので、信号無視が普通になっているのかもしれない。もしかしたら、このご時世だけれども、ありえないほど急いで何かに間に合おうとしていたのかもしれない。

山を視界に入れないければ、私は彼を轢いていたのではないかと思う。山が目に入って、ほんの〇コンマ数秒、私が車の速度をゆるめなければ。同時に、もうこの界限では信号を守らない子供が出てきているから、交差点の右折左折では歩道の人の動きをこれまで以上に目を懲らして見なければならぬ、と心に決める。

「ああいう子嫌い。あの年ぐらいからずっと嫌いだった」

「ははは」

「学校に行けないのをああやって発散してるのかな」

「そうなんだろうね」

「めっちゃくちゃ頭悪いんだろうな」

「そうかもしれない」

② 私は慎重に言葉を選びながら答える。発信者の姪も、聞き手の私もただでさえ疲れているから、姪の怒りを助長するような言葉はやめたほうがいいけれども、ちゃんと聞いてやらないのも良くない。姪は自宅で誰も話を聞いてくれないから、私を頼って家に来たのだ。私の甥にあたる玖実子の兄の爽太は、高級老人ホームの施設管理人で、毎日外に働きに出ているのにもかかわらず、家の中のそこらじゅうを素手でさわって回り、消毒液を思いついた時に大量に使い、マスクは少し使用しただけでも洗って使い回したりはせず捨てる。私の年の離れた妹である玖実子の母親は、そのことに完全に迎合して何も言わない。姪が、ドアノブの消毒と衛生用品の残りについてたずねようとすると、こんな時にうるさくしないで、気になるならあんたが買えば、と高校一年の姪に投げやりに言うだけだという。

③ 宗教の違う人とは一緒に住めない、と姪は言っていた。姪は新しい規律と恐怖の狂信者で、甥と私の妹は感染について鷹揚にしているも勝てないことはないギャンブルのようにとらえているふしがある。ウイルスを体に入れるも入れないも射幸心の対象なのかもしれない。母親、兄、妹の三人家族の中でいちばん若い姪がもつとも過敏になっているというのも不思議な話だったが、若いいうことは何かを強く信じられるということでもあると考え直すと、彼女の態度にも納得がいった。

疫病下の世界で家族と宗教が違ってしまった姪は、小学校高学年以来ほとんど行き来がなくなっていた私に電話をかけてきて、伯母さんの家にいさせてくれないか、と相談してきた。三月の終わりのことだった。一人暮らしのほうがリスクが少ないことはわかってるからすごく悪いんだけど。私は二月から家にいても一日八回手を洗ってるし、友達とも動画の通話でしか話していないし、いつも自分の部屋にいるから感染はしていないと思う。でも症状がでないやつだったらごめん。その時は……。

④ 姪は自分の言っていることにだんだん振り回され始めた。その時は何なのだろう、と私は思ったけれども、口にはしなかった。その時は五十歳を超えている私も感染するのだろう。重い症状ならもうそこで姪ができることは何もない。死ぬほどではなくても後遺症が出るような症状なら、姪は私の面倒を見たりするんだろうか。ぜひそうしてくれ、と私は言えないような気がした。

私にとって一方的に分が悪い相談だということを、姪もわかっていた。それでも私は、姪が声をかけてきたことがうれしかったの

かもしれない。いいよ、来たら、と答えた。それで姪は私の家にやってきた。

今日は、姪は私の出勤の車に乗っていったん家に帰り、私の家に持ち込みたいものを用意してから部屋にこもって過ごし、また私の出勤の時に私の車に乗って帰る予定だった。私の職場である観光案内所は、さっきの交差点の手前にあるのだが、今日は姪が家に戻るので一度職場を通り過ぎて交差点を左折した。母親である私の妹には黙って出てきたので、顔を合わせるかもしれないのが憂鬱だ、と姪は言っていた。私自身には妹から「娘を家に戻してよ」という連絡があった。私は「学校も休みなんだし本人のしたいようにさせれば」と返信した。

私としては、疫病に支配される世間よりも、妹の家族のすれ違いよりも、さっき山を見たことで自転車の男の子と衝突せずに済んだことに今はとらわれていた。それほど怖い出来事だったし、不思議なことでもあった。

「さっき自転車の男の子とぶつからなかったのは、一瞬だけ山が目に入って、あ、山と思ったからなんだけど」

「何？ よそ見？」

「なんだろう、一回左右を確認した後、山だな、と思ってもう一回確認するとあの子が突っ込んでくるのが目に入って、速度を落とせたんだよ」

「そうなの。偶然だ」

「毎朝、出勤の時にあの山に向かって運転するし、職場の窓を開けて北を向くと必ず見えるから、憂鬱な眺めではあるんだけどね」
帰り道であの山に向かって運転するのであれば、どれだけ印象が違っていただろうと思う。

「小学生の時、遠足で何回か登ったな。まあそれだけだけ」

「けっこう大変だよ。見た目と違って」

「そうかな。山としては普通じゃないの」

今度は妹の家に寄るために右折する。左にも右にも左前方にも右前方にも猛スピードで突っ込んでくる自転車はない様子でほと

した。

「まあ嫌いじゃないけど。そこにあるだけって感じだよ。今日も明日も変わらない。何もしてくれない。病気を治してくれない」
姪の言うこともともただけれども、私は少しだけ反論したくなって、まあそれもそうね、と調子を合わせた後に続ける。

「たださっきはそこにいるだけで役に立ったのよね」

「それもそうか」

⑤ 私の言葉に姪は、構えていたのがぱらしくなるほどあっさりと同意した。

じゃあ退勤の時に迎えに来るから、と言って家の前でおろすと、荷物を取ったらバスで伯母さんの家に戻ることにするよ、と姪は言った。

「公共の交通機関も怖いんじゃないの？」

「それより家族が信頼できないことのほうが怖い」

姪はそう言って肩をすくめて、いったん自分の家に戻っていった。

*

印南先生ね、陽性だったらいい、と塾の経営者の真野先生は五日前の電話で言っていた。だから当然仕事は休んでもらうんですけど、僕も実は咳をしていたり、ものの味がわからないことがあってね。それで奥田先生、僕も申し訳ないけど大事をとって……。

三人で回している中学生向けの小さな学習塾に、私は勤務している。給料は高くはないけれども、この町は家賃が安いし、子供たちを教えることはやりがいがあるので、悪くはない仕事だった。職場は自宅から近くて徒歩圏内だった。ただ、経営者の真野先生には、ちよつと適當というか、面倒な仕事は雇っている講師に押しつけて、自習室で個別指導と言いつつ生徒と雑談ばかりしているよ

うなところがあつて、お金を払^{はら}っている立場だからそれは仕方がないのだが、かなりここぞという事態で突然^{とつぜん}仕事を降りたりするのが一緒^{いっしょ}に働いていて戸惑^{とま}うところだった。だからといって厳しく結果を求められたりするわけでもないの、私と同僚^{どうりょう}の印南先生はなんとかそれをこなしていた。

印南先生は私の先輩^{せんぱい}で、悪い人ではないけれども、酔^ようと絡^{から}むのが合わなかった。私もそうだけど独身で、週に何度か行っている居酒屋のうちの片方が休業したということを、教室を隔^{へだ}てたウェブ通話でやりとりをするたびに愚痴^{ぐち}っていた。四月からこの塾^{じゅく}の三人の講師は、同じフロアの教室と自習室と職員室という三か所に分散してウェブ通話で話すことで社会的距離^{きょり}を保っていた。職員室はかなり狭^{せま}くて、二人入ると危機感を覚えるので、私が提案した。授業もすべてウェブ通話で実施^{じっし}している。

もう片方は開いてるんですか？

そうだな。建物が壊^{こわ}れたわけじゃないし、呑^のんで騒^{さわ}いでしゃべってたら辛気^{しんき}くさいことは忘れちゃうよ。手は洗うけどな。感染^{かんせん}したらその時はその時だ。

私は、笑っているふりをして顔を背^{そむ}けた。その話をした一週間後、印南先生は熱を出して塾を休み、十日後である一週間前、真野先生から感染したらしいという連絡^{れんらく}があつた。

印南先生が熱を出してからは、私と真野先生で印南先生の持っている授業を手分けして受け持っていたのだが、ただでさえあまり授業をやらない真野先生が通常よりも多く授業を受け持つのは面倒^{めんどう}だったらしく、誰^{だれ}か代わってくれないかなあ、とタブレット越^こしに呟^{つぶや}いているのを何度か耳にした。

そして私の携^{けいたい}帯に、印南先生の感染の報告と、自分も休むと言ってきたのは五日前のことだった。奥田先生には全科目を受け持つてもらふことになるけど、まだこの時期はどの科目も滑^{すべ}り出^だしで簡単だから、運が良かった、と真野先生は言った。

授業をさ、十分ほど短縮してもいいよ。三人の講師のうち二人が休んでいると言ったら保護者もわかってくれるだろう。手当は出すよ。

それで私は、月曜から土曜まで、三人分の授業をするために一人で学習塾^{じゅく}に出勤している。一年と二年は週に四コマで各二二〇分、三年は週に五コマで各一五〇分の授業を、すべて一人でやっている。

やってみると、授業そのものではないことはない。でも、受け持ちの数学と理科に加えて、国語と社会と英語の予習をしなければいけないことはつらかった。自宅でもほとんどの時間、深夜までどう教えるかについてのレジュメを作っている。真野先生がやっていた仕事を加算されても知れていたが、印南先生は私と同じだけ仕事をしていたので、単純に仕事量は二・五倍になった。自分の時間はないに等しかった。

人生でそういう時期もある、と考えるようにはしている。自分自身が受験生だった頃は、もつと余裕^{よゆう}がなかったしきつかったとも思う。ただ、印南先生は自分の感染^{かんせん}に関して大きなヒントを残していったし、真野先生の「大事をとって」がどこまで本気かわからないのがつらかった。

実態はどうであれ、疑わせない、というのも一つの礼儀^{れいぎ}だと思う。^⑥しかし、私が一緒に働^{いっしょ}いている二人に関してはその限りではない。

十六時半から始まる中学二年の国語と英語の授業の準備をしないといけないのに、私は、一人でいるには広い教室で急に居心地^{いこち}が悪くなって、窓際^{まどぎわ}に寄って通りを見下ろしてみる。もともと、向かいの観光案内所に観光客が入っていくぐらしか目立った人通りはない通りなのだけど、四月に入ってから自動車交通量も減って静まりかえっている。人間はいつたどこへ行ったのだろうという具合に。

塾に來ているすべての生徒の授業を受け持っているという以上に、他の二人が戻ってきた時に自分がまともに働いていられるだろうかということが不安だった。一言で言うと、自分が何か暴言を吐いてしまわないだろうかということに関して、自信が持てなかった。

ここ最近、私は窓際で通りを見下ろすことばかりしている。昨日も、休日出勤した一昨日も、その前の日も、さらにその前の日も、

通りは静まりかえっていた。

まだこういう生活になって数日なので、身を投げたりはしないと思う。もつと長引いても、私はそんなことはしないかもしれない。⑦それでも道路のアスファルトは濁った暗い川のように見えた。赤い車でも通らないかとしばらく見つめていたけれども、私が見下ろしていた信号が三回赤になるまでの間、車は一台も通過せず、自転車の男の子が一人、異常なスピードで歩道を走っていっただけだった。

*

朝にスコーンを食べ、昼もスコーンを食べたけれども、まだ余っていた。三時のおやつにも食べられる。家に帰ったらまだあるの
で、夜の食後のおやつにも食べられる。

姪の玖実子^{めい}が作ったのだった。自宅から買い置きしていたホットケーキミックスを持ち帰り、それさえ持ち込めばできるだけ自室から出なくて済むように、家族と顔を合わせないように夜中の台所で作れるだけ作る、という分量で私の家でも作ってしまったので、二人で二日ほど食べるには大量になった。明け方、山盛りのスコーンを前に驚いて^{おどろ}いると、そうか、家じやなかったんだ、と姪は呟^{つぶや}いていた。私が食べるかもしれないので、ということ、マスクをつけて作っていた。スコーン自体は普通^{ふつう}においしい。玖実子は作ったスコーンをトングを使ってフリーザーバッグに手早く小分けにして、そのまま眠^{ねむ}りに行った。

母親や兄と遭遇^{さうぐう}して言い争いになることを避^さけるため、姪はすっかり夜型になっていた。それで学校に戻^{もど}れそう？ とたずねると、学校が始まる二日前に徹夜^{てつや}をする、と姪は言っていた。二日前というのがポイントなのだという。そしたら一日前の夜にちゃんと眠^{ねむ}くなるそう。勉強はよくしている。

私の勤めている観光案内所は建物の二階にあって、今は完全に足が止まっている観光客以外に目指してやって来る人が少ない施設^{しせつ}。

とはいえ、午前は五人、午後になって二時間過ぎてからは三人の訪問があった。地元の人たちのようだった。ここは食料品を取り扱っているため一応開けていてくれとのことなので出勤している。一緒に働いている二人の後輩は電車通勤、私は自動車通勤なので、

後輩たちは自宅待機で、私一人が通勤することになっている。今はどのみち暇なので一人で間に合っている。

乾燥しいたけや切り干し大根、地元の食材が入ったフリーズドライの味噌汁のパック、同じようなコンセプトのお茶漬の素、炊き込みご飯の素のレトルトなどがけっこう売れているため、今は追加注文の伝票を作っている。

私は、お茶を淹れ直して、パソコンの隣に置いてあるフリーザーバッグに入ったスコーンを眺める。子供の握り拳大のが三つ入っている。⑧ 姪が「三時のおやつに」とくれたものだが、喉が渇くから今日はいつもとよりたくさんお茶を淹れないとなあとはいき始めた。それはそれでトイレに行く回数が増えるし困ったなと思った。というか三時のおやつは職場では食べない。

家に帰っても食べることを考えると、今は誰かにあげてしまってもいいという気分だけれども、出勤しているのは私一人だし、この建物に入っている店舗や事務所などはすべて閉まっている。小さな税理士事務所と音楽教室、整骨院、民芸品や地元の作家の作品を売る雑貨屋などが入っている。整骨院の院長の女性は、高齢のためこれを機に院自体を閉めるということで、雑貨屋の店主は、今は自宅でウェブ通販の仕事に力を入れているようだ。彼女の最後の出勤日に、草木染めのガーゼで作ったマスクカバーをたくさんもらった。姪にも数枚あげたのだが、事務所にある分だけでも十枚あった。どうせお客さんも来ないし、と最後の出勤の日は店にあるミシンで一日中作っていたのだという。できれば彼女にスコーンを分けたかったのだが、彼女が店を閉めたのは姪が私の家にやってくる一日前のことだった。

地元の乾燥食品を卸す商社に注文票をFAXで送ると暇になったので、三か月に一度発行している、近隣の駅や公共施設に置いてもらう観光パンフレットの中身を作る作業にとりかかる。次の発行は六月だけど、七月の大きなお祭りも、八月のちよつとした音楽フェスも、今年は中止が発表された。もともと観光客は少ない場所で、この案内所の存続も毎年危ぶまれているくらいであるため、逆に今回の国全体にわたる観光客の減少の影響が少なく済んだことが、なんだか間抜けだけとありがたかった。

今はしいたけなだけどな、夏はしいたけじゃないんだよな、でも秋に向けて無理矢理推すか、と完全に空になってしまった乾燥しいたけの売場を眺めながら思う。最近、店頭でもウェブでもとてもよく出ている。しいたけは山で作っている。私が昨日の朝、交差点で見たあの山だ。そのおかげで、自転車の男の子を轢かずにすんだ。

そういえばおとし、しいたけの栽培農家の人に小さな原木をもらって、自宅で育てたのは楽しかった。商品化はしていないのだけど、このさい考えてみてくださいよと持ちかけるのはどうか。

私は、椅子から立ち上がって窓を開け、北側を向いてみる。やはり山があった。季節柄、鮮やかな緑色で、意外と登ると厳しいんだけど見た目にはなだらかで、動かなかった。空はものすごく晴れていた。

道路を隔てた向かいのビルの方から、同じように窓を開ける音がしたので、そちらを見ると、若い女性が窓枠に両腕を置いてうつむいていた。自分とおなじように山を見るつもりなんだろうかとも思ったのだけれど、彼女はいつも以上に交通量の少ない道路をずっと見つめていた。

周りにまったく人がいなかったし、まだ高校生の姪にたずねてもちょっとあてにならないから、彼女に「自宅で育てられるしいたけの原木は欲しいか？」ということをつたえずねたかったのだが、そんなことをしてもあやしまれるだけだと思いついて、私は別の言葉を口にした。

*

山が今日もきれいですね！と道路の向こう側で窓を開けていた女性が言った。二階の観光案内所の人だと思う。知らない人だった。小さな町なので、見かけたことぐらいはあるかもしれない。

⑨ 私は驚いて、驚いた勢いで頭を上げて北を向いた。確かに、よく晴れた空の下に山があった。「あった」というのもおかしい具

合に、当然のように隆起^{りゅうき}していた。塾^{じゅく}の生徒たちが小学校の遠足で必ず登るのだということを聞いたことがある。遠足のゴール地点には小さな滝^{たき}があつて、水をさわると冷たくて気持ちがいそいだ。

感染^{かんせん}拡大の収束はまだ見えないけれども、少し落ち着いたら登りに行ってもいいかもしれない、と私は思った。

あの！ と観光案内所の人はさらに声をかけてきた。スコーンいりますか!? 手作りの！ と突拍^{とつぱふし}子もないことを言ってくる。私は、この世相で手作りの食品をくれようとするの？ と疑問を感じつつ考えていると、家にいて一日八回手を洗う女の子が、マスクをして作ったやつです！ と観光案内所の人は続ける。そう言われると心が動く。

今もつともつらいのは、ウィルスの蔓延^{まんえん}以上に他人が信用できないことであるような気がする。経営者^{けいぎやう}と同僚^{どうりやう}にそれを思い知らされたことが、長い時間塾のために働いている以上の苦しみだった。

誰^{だれ}にでも良いところがあるのは知っている。安全な世界では、印南先生だつて真野先生だつて普通のいい人だ。そのことまで否定する気はなかった。でも今は。

それください！ と私は叫^{さけ}んだ。

気持ち悪かつたら捨ててくださっていいんで！ と観光案内所の人は大声で言う。

よく加熱します！ 気持ち悪くないです！ と私は答える。

じゃあ、二十分後にそちらの建物のドアの入り口に掛^かけておきますね！ と観光案内所の人は言つて、大きく手を振^ふつた。私も大きく手を振り、それぞれに窓を閉めた。

よく考えたら、マスクをせずにじかに人としやべつたのは久しぶりだということに気が付いて少し驚^{おどろ}いた。

私は、中学一年の理科の授業のために予習をしていた教室の机^{もと}に戻^{もど}つて、時計を見る。植物の茎^{くき}にはそれぞれ師管と道管が通っている。師管を通じて葉で作られた栄養分が植物の各部位に運ばれ、道管には水や水に溶^とけている養分が通る。師管と道管がまとまつた部分は維管束^{いかんそく}といつて……。

他の二人が戻ってくるとして、ひどいことを言わない自信はまだなかった。⑩でも、ないことをとにかく今は自分に許そうと思っ
た。仕事そのものの量に関しては、人生ではこんな時期もある、という見方が固まってきた。これを持ち越えるのも挑戦の一つかも
しれない、とも思える。そして、本当にもう限界を迎えそうになったら、自分はやるだけのことはやりました、と真野先生にちゃ
んと言おうと思う。

二十分後、私は教室から出て建物の入り口に行き、観光案内所の紙袋がドアに掛けられているのを見つけた。ハンカチで取っ手を
覆ってロビーに持つて入り、慎重に開けてみる。フリーザーバッグに入ったスコーンと、薄紙に包まれた四角い布の何かが五つ、そ
して巨大で黒々としたゴシック体で印刷されたコピー用紙が、紙袋の内側にしっかりと貼ってあった。取り出してさわって眺めなくて
もいいように。

『フリーザーバッグは一応食器用洗剤で拭いたんですが、不安ならそちらでも拭いてください。布はうちのビルの雑貨屋さんがくれ
たマスクカバーです。包んである紙はどの程度安全かはわかりませんが、表面を内側にして捨ててください。紙袋の底に新品のビニ
ール袋があります。底の方しかさわってないので、よかったら持ち運びに使ってください。紙袋はビルの前に置いともえたら回
収に行きます』

私は、そのメモの言うとおり、ビニール袋を取り出して開き、スコーンの入ったフリーザーバッグとマスクカバーをハンカチで
持つて中にしまう。そして紙袋をビルの外に出す。道路の向こうの観光案内所は、他の建物の部屋と同じように静まりかえっていた。
私はビニール袋をぶらさげて、誰もいない教室に帰った。スコーンは自宅に持つて帰って食べようと思った。

十六時半から、理科と数学の授業が始まった。タブレットをスタンドにセットして、私は生徒たちに挨拶をする。少し咳払いをす
ると、「先生大丈夫？ 熱出てない？」と男子の誰かが言う。たぶん水田君だと思う。

「塾へ来て測りましたが、熱はないです」

「ならよかった」

他にちらほら、よかった、という声が聞こえる。それから空気をなでるような同意のささやきがタブレット越しに伝わってくる。「どの人も気をつけて。でもたぶん長いことこういうのは続くだろうから、ときどきは山でも見てぼーっとして」

山はいやだー、べつのものもいいー、という不満の声が聞こえる。じゃあ特急しなのの前展望の動画とかね、緑のきれいな季節の！ と言うと、マニアックすぎ、と小さい笑いが起きる。ちよつとうけた、と私はほっとする。

「先生と話していると落ち着く。もつとしゃべってよ」

「授業しないといけないんで」私はできるだけ毅然とした態度を装って、タブレットに向かって肩を張ってみる。「でも私事です」

⑪ そう言っ、私は黒板に巨大な円を描き、中にもう一つ円を描いた。それから中の円の線をまたぐような小さめの楕円をいくつか描く。維管束だ。双子葉類の断面を描き終わると、私はその右に单子葉類の断面を描き始めた。

【問1】——①「私は間一髪^{かんいっぱつ}のところで避^よけた」とありますが、「私」についての以下の説明文の a c に当ては

まる語を、本文より指定された字数で抜き出して答えなさい。

この物語には、二人の「私」が登場する。物語の冒頭、車を運転しているのが a (5字) に勤務する「私」であり、後に登場するのが町の b (3字) に勤める「私」である。二人の職場は、通りをはさんで向かいに位置する建物の中にあり、 a はその建物の c (2字) がある。

【問2】

——②「私は慎重に言葉を選びながら答える」とありますが、ここでの「私」について説明したものととして、次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 姪の乱暴なものの言いには大きな問題があるが、彼女の今後のために感情を抑える方法を伝えることこそ自分の役割だ、と考えている。

(イ) 姪の乱暴なものの言いに対しては違和感を覚えるが、彼女が本当に意味しようとするところをとらえなければならぬ、と考えている。

(ウ) 姪の乱暴なものの言いには反発も感じてしまうが、その反発したくなる自分の気持ち自体に問題があるのかもしれない、と考えている。

(エ) 姪の乱暴なものの言いには安易に同意できないが、彼女にはそのような言葉を口にする背景があることに配慮が必要だ、と考えている。

【問3】

——③「宗教の違う人とは一緒に住めない」とありますが、「宗教が違う」とは、ここではどのようなことを意味していますか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) そのつもりはなくても、互いに攻撃し合ってしまう、ということ。

(イ) ものの見方や、とらえ方自体に大きな隔たりがある、ということ。

(ウ) 生活を共にしていると、いら立ちが増すだけである、ということ。

(エ) 自分たちの言い分を、むりやり正当化しようとする、ということ。

【問4】——④「姪は自分の言っていることにだんだん振り回され始めた」とありますが、この時の姪の様子を示す四字熟語と

して、次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 自作自演

(イ) 自暴自棄 じぼうじき

(ウ) 自縄自縛 じじょうじばく

(エ) 自問自答

【問5】——⑤「私の言葉に姪は、構えていたのがばからしくなるほどあつさりと同意した」とありますが、この時の「私」の

様子を示す慣用句として、次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 拍子抜けする ひょうしぬ

(イ) 木で鼻をくくる

(ウ) 匙をなげる さじ

(エ) 手玉にとる

【問6】

⑥「しかし、私が一緒に働いている二人に関してはその限りではない」とありますが、それに関する次の説明文中の a ～ d に当てはまる語句を、後からそれぞれ選び、(ア) ～ (ク) の記号で答えなさい。

自分にとって面倒なことを a のある真野先生と、感染することに對して b をして
いると広言してきた印南先生。二人が休むことになり、三人分の仕事をする事になってしまった「私」は、仕事量そのものの「きつさ」もちろんあるが、二人の普段の言動が現在の結果に表れていると思い、「つらさ」を抱いている。
真野先生と印南先生の二人とも、 c が大きく欠けていると感じているのだ。二人が戻ってきた時に、
d について恐れを抱くほど、「私」の思いは強いものとなっている。

- | | | |
|----------------|----------------|------------------|
| (ア) 綿密な対策 | (イ) 無頓着な振る舞い | (ウ) 感情を制御できなくなる事 |
| (エ) 共に働く者への配慮 | (オ) 無かったことにする癖 | (カ) ひどい扱いを受ける事 |
| (キ) 生徒たちに対する愛情 | (ク) 他人に押しつける傾向 | |

【問7】

⑦「それでも道路のアスファルトは濁った暗い川のように見えた」とありますが、この時の「私」の心情をあらわす語の組み合わせとして、次の中から最も適当なものを選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- | |
|-------------|
| (ア) 閉塞感・絶望感 |
| (イ) 焦燥感・敗北感 |
| (ウ) 喪失感・恐怖感 |
| (エ) 劣等感・罪悪感 |

【問8】——⑧「姪が『三時のおやつに』とくれた」とありますが、この時の「私」について説明したものととして、次の中から

最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 姪が作ってくれたスコーンはおいしいものではあったが、朝も昼も食べ続けてきて、さすがにもうこれ以上は食べたくないという思いが自然と高まってきている。

(イ) スコーンを分けてくれた姪の気づかいはあるが、その言動には社会人である自分の常識からするとずれる部分があり、少々持て余してしまっている。

(ウ) 現在の状況を考えずあまりに多くのスコーンを作っただけでなく、こちらの都合を無視して自分の思いを一方的に押しつけてくる姪に、いら立ちを募らせている。

(エ) スコーンを大量に作ってしまった姪の配慮のなさにあきれる気持ちもある一方、何とかして残さないように食べきれないともつたいない、と義務感にかられている。

【問9】——⑨「私は驚いて、驚いた勢いで頭を上げて北を向いた」とありますが、ここでの「私」はなぜこのような反応をしたのですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 窓の外を見ながら職場の状況について考えることをしていたなか、心のどこかでずっと気になっていた山について突然指摘され、「私」の気持ち之急速に揺れ動くことになったため。

(イ) 見知らぬ人が何の前触れもなく、見慣れた山についてわかりきったことを言ってきたことにより、なぜわざわざそんなことを急に言うのか「私」はかえって混乱してしまったため。

(ウ) 見覚えのない人が親しげに話しかけてきただけでなく、山に関する発言も気心の知れた友人に向けたものであり、「私」は自分の記憶を瞬間的に確かめなければならなくなったため。

(エ) 大声で突然話しかけられたのみならず、窓から通りを見下ろしてばかりいた「私」にとって、これまで視界に入っていない山についての発言は全く想定外のものであったため。

【問10】

⑩「でも、ないことをとにかく今は自分に許そうと思った」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 二人が職場に戻ってきた際に、これまでの心身両面にわたる苦しみについて堂々と文句を言うためにも、いま目の前にある仕事をやり遂げていこうと決意を固めているということ。

(イ) 現在の苦労の原因を作った二人に対する憤りを含め、自分の感情のあり方や考え方に問題はないと一旦受け入れて、当面の仕事に必死に向き合っているということ。

(ウ) 自分に多くの負担を強いた二人に対する腹立たしさに我を忘れそうになるが、その気持ちに歯止めをかけるため、はやく落ち着かなければと自分に言い聞かせているということ。

(エ) 他の二人分の仕事を背負うことになった状況に変化はないが、どうにかしてその仕事をこなす目的が立ってきたこともあり、自分の努力を自分で認めようとしているということ。

【問11】

⑪「そう言って、私は黒板に巨大な円を描き、中にもう一つ円を描いた」とありますが、それに関する次の説明文中の a ～ f に当てはまる語句を、後からそれぞれ選び、(ア) ～ (ク) の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

世の中がすっかり変わってしまい、職場の状況も大きく変化する中、「私」は仕事量が増えたこと以上に、a に苦しみを抱き、窓際から通りを見下ろしてばかりいました。そんな時、通りの向かい側の建物から突然声をかけられます。山を見上げた「私」は生徒たちの言葉を思い出し、今後登りに行くことも考えています。山に視線を向けたことは、いつも道路のアスファルトばかり見ていた「私」にとって、b となったでしょう。さらにスコーンをもらうことになった「私」は、他人との直接の会話が久しぶりだったと意識していますが、このことを通して、自分にとつてのc にもなるのです。届けられたスコーンは丁寧に包装され、それはd が感じられるものでした。その上で授業に向かった「私」は、生徒との対話においても、これまで失われていた部分が満たされていく感覚を抱いたようです。「私」はここで、e をあらためて実感し、仕事に真摯に向き合おうとしているといえるでしょう。思い返せば、声をかけた側のもう一人の「私」が、山がそこにあったおかげで自転車の少年との事故をさけることができた、と感じるところから、この物語ははじまっていました。この物語に登場する二人の「私」はともに、いつも変わらずにそこにある山の、f に気づいた、と言えるかもしれません。そのことは二人にとって、他者とかかわり方に対する、b ともなっていたのです。

(ア) 賞賛に値する技量あたひ
(イ) 信頼するに足る配慮しんらい
(ウ) いつもとは違う見え方ちが
(エ) 自分の思いをぶつける対象

(オ) 他人を信用できないこと
(カ) 他者とのかわりの重要性
(キ) 仕事のあり方を見つめ直すこと
(ク) 気持ちの変化をもたらすきっかけ

【出典】

Ⅰ 大平健 『やさしさの精神病理』(岩波新書、一九九五年)二ページ～九ページ

Ⅱ 津村記久子 『水曜日の山』(『25の短編小説』朝日文庫、二〇二〇年)三〇一ページ～三二八ページ

